

共通語の「ず」は「ジ」という発音になることが多くなっています。「沖繩語」に属する首里方言では「ミジ」と言いますし、この言語地図でも多くの地域で「ミジ」という語形が出ています。ところが、見過ごしてならないところがあります。それは、「ミス」「ミジユ」「ミドウ」と「ず」が「ジ」になっていない地域で、恩納村では、恩納・瀬良垣をはじめとする一部に地域に見られます。それだけではありません。言語地図を良く見ると、「ず」が「ジ」にならないところは、金武町や宜野座村の地点にも多く見られます。すなわち、この「ず」から「ジ」へ変化しない特徴は、現在ある市町村の境界をまたがって、この地域一帯に広がっていると言つこ

とができるのです。この地域において、ウ段がイ段へと変化しない傾向は、「ず」のみならず、「つ」(角の「つ」など)や「す」(煤の「す」など)に対応する単語でも見ることができます。

「水」から、今度は、動詞の「飲む(のむ)」を採り上げてみましょう。「飲む」の語形は、「ヌムン」という地点と、「ヌミン」という地点があります。「ヌムン」は「沖繩語」の首里方言と同じ語形で、多くの地点に分布していますが、「ヌミン」もそれに負けず劣らず、比較的多くの地点に分布しています。「水」の分布と似ていて、恩納村の恩納・瀬良垣という地区が「ヌミン」、併せて、金武町や宜野座村も多くの地区で「ヌミン」と言っています。

また、恩納・瀬良垣地区以外の恩納村の地区でも「ヌミン」が、割合と広がっています。

「言語地図」におけるこれら共通する部分については、いったいどんな要因が考えられるでしょうか。おそらくこれらの地域的な共通性は、恩納村間切の一部が1673年に分離独立する前、金武間切に含まれていたことが影響を与えている可能性があります。「水」の語形を「ミジ」と言わず「ミス(ミジユ)」と言ったり、「飲む」の語形を「ヌムン」と言わず「ヌミン」と言ったりするのは、

それらの語形を言う地域が金武間切に属していたことと無関係ではないように思われます。

恩納岳あがた 里が生まれ島 杜も押し退けて
 こがたなきな(恩納なへ)
 ウンナダキ アガタ サトゥガ んマリジマ
 ムイン ウシヌキテイ クガタ ナサナ
 (恩納岳の向こうは愛しい貴方が生まれた村。山も押し退けてこちら側にしたい。)

恩納村が誇る女流歌人、恩納なへ(ウンナナビ)の詠んだ琉歌として知られていますが、この琉歌は、恩納岳による「遮断」の歌ではなく、恩納岳を仲立ちとした「交流」の歌と見るべきだと言う研究者もいます。恩納なへには、恩納村から見て恩納岳の向こう側の金武に、松金(マチガニ)という恋人がいたという伝説がありますが、そもそも恩納と金武の間で互いに「交流」を禁じられていては、恋人になるといふことすら困難でしょう。上記の単語(水・飲む)に見られる語形の地域的な共通性は、現在では別々の市町村等に区切られているけれども、かつては共通の生活圏であったことを示す有力な証拠とも言えます。

(沖縄国際大学教授)



「飲む」の言語地図